愛の氷獄

cian

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛の氷獄

【Ｎコード】
Ｎ０８３１Ｍ

【作者名】
ｃｉａｎ

【あらすじ】
やりがいのある仕事、頼りになる友人、尽くしてくれる年下の彼氏。
刺激は少ないが、ようやく安定した生活を送る日名子は、ある日別れた夫の秀史と再会する。
「君には償いをしてもらう」
身も心も尽くして、そして破滅した結婚生活の相手。誰よりも何よりも愛した男。
拒む日名子だが、秀史は強引で…

7年前（前書き）

私的好物をいっぱい詰め込んだハーレクイン風恋愛小説です。
拙い文章ですが、どうぞお付き合いください。

7年前

「なんて軽率な…君は一体何を考えていたんだ…」

静かに響いた低い声は、私を絶望へと突き落とす。
無意識のうちに腹部に手をあて、そこに既に何者もいないのだという事実に泣きたくなった。
どうしてこんな事になったのだろう…なんで…
虚ろな瞳から涙が滑り落ちる。滲む視界の向こうに立ち去る背中を見ても、私は一言も言葉を告げられなかった。

全てを、失ってしまった――――

誰もいない病院の個室で、私はただ一人泣き続けていた。

日名子の現状

「本庄くん」
名前を呼ばれ日名子は噛り付いていたデスクから顔をあげた。恰幅のよい、５０代半ばの部長がにこにこ顔で立っている。
対する日名子は、ここ数日の残業で憔悴した顔をしている。流石に三十路となると、夜更かしも体に堪える。
「なんですか？花木部長」
「うん、ちょっといい話だ」
一遍変わらぬにこにこ顔で告げられる。日名子は「はぁ」と生返事をした。花木は常日頃からにこにこしていて、叱責もそのにこにこ顔で行うので、表情からはいまいち話の内容が想像しにくい。
「疑わなくていいよ。本当にいい話だから。この間言っていた新しい雑誌の副編集長にね、どうやら君が決まりそうなんだ」
「…本当ですか！？」
その雑誌は、働く女性を対象としたもので、日名子は企画の段階から深くかかわっていた。
思わず椅子から立ち上がると、花木はその相貌をますますにこやかにして、けれどしっかり釘をさす。
「今はまだ内々の話だけれど、ほぼ決定だと思うよ。我が社は比較的女性でも重職に付きやすいけれど、３０で副編集長というのはなかなかない。大変だと思うが期待もしているよ」
「はい！それはもちろん！それで、あの…編集長はやっぱり…？」
「原科くんでいこうと言っている」
自分より一回り年上の、けれど尊敬する先輩女子の名を聞いて、日名子はますます瞳を輝かせた。雑誌の企画は、彼女から誘われて行ったことだ。その成果が出て創刊させてもらう事になり、一緒に同じ雑誌を作っていけるという事に日名子は嬉しさを隠せない。
「ちょ、ちょっと原科さんに挨拶してきます！」

いそいそと支度をする日名子を、花木が苦笑してみている。
「まったく…本当に仕事が好きで仕方がないって感じだね、本庄くんは」
悪気のないその言葉が、一瞬日名子の心に傷をつける。
『仕事が好きで仕方がない』んじゃない。
ただ――――…

自嘲的な笑いを胸に秘めて、日名子は部長に一礼するとその場を立ち去った。

「これから忙しくなるわよ～。よろしくね、ひなちゃん」
「こちらこそ。玲佳さんと一緒に仕事できるの、嬉しいです」
カチンとグラスを合わせて、微笑みあう。原科玲佳は、とても40代に見えないスタイリッシュで魅力的な女性だ。雑誌の企画を始めて以来仲良くなり、日名子とはよく一緒に飲みに行くようになった。
そのため、お互いのプライベートもそれなりに知っている。
「でも、大丈夫かしら。私はともかく、忙しくなって、年下の彼氏怒ったり拗ねたりしない？」
年下男は甘えん坊でしょ～。と冗談交じりに言われ、日名子はここ2年付き合っている彼氏の姿を思い出す。残念ながら、玲子の想像とは全く噛み合わなかった。
「…むしろ、喜ぶ気がします。忙しくなれば、それだけ私の世話し甲斐があるって」
彼氏である魁人は、極度の世話やきだ。7歳も年下であるにも関わらず、時に日名子の兄のようにふるまい、家事やら健康面の管理やらに気をつかってくれる。お陰さまでここ2年、日名子は大きく体調を崩した事はない。

「あー…そういえばそういう子だっけ、彼氏くん。そういやそうだった。意外に思った覚えがあるもの私」
手にしたギムレットをグイっと飲みほし、お代わりを頼みながら玲佳が言った。
「意外…ですか？」
「そうそう、だってひなちゃんって、どちらかというと『尽くされたい』んじゃなくて『尽くしたい』タイプじゃない？私や他のスタッフとの仕事ぶりを見ていてもそう思うのよね。それなのに、彼氏にはやたら『尽くされ』てるから、あれ～？て思ったのよ」
鋭いな…と内心苦笑しながら、日名子は自分のスクリュードライバーに口をつける。
そう、玲佳の言っている事は正しい。
日名子はもともと人に何かをしてあげるのが好きなタイプだし、恋愛においても玲佳の言う通り『尽くしてあげたい』タイプに近い。玲佳には言っていないが、昔、短い結婚生活を送った相手には身も心も捧げて尽くしていた。それが何よりも幸せだった。
けれどそんな結婚生活に失敗して、しばらく恋愛を避けて…今はこうやって『尽くされる』恋愛に落ち着いたというわけだ。
正直、あの結婚生活は思い出すのも辛い。自分ばかりが尽くしていたという事だけが離婚の原因ではないが、それでもあそこまで全てを捧げていなければ、もう少し違った結末があったのではないかと思う。
魁人との恋愛は楽だ。生来の性分で、自分が尽くしていない事にどこか物足りないものを感じる事もあるけれど、魁人はそんな日名子の事もわかってくれている。温かい陽だまりのような人物だ。
“あの人”とは、まるで違う――――――
魁人が陽だまりなら、“あの人”はまるで氷の彫像だった。
冷たくて、でもひどく魅力的で。触ったとたんピタリと手が吸い

ついてしまうような…けれど冷たい人。そして美しい人。その吸引力に魅せられた。
ああ、思い出すだけで、どうしてこんなに胸が痛むのだろう…
「ひなちゃん？大丈夫？」
「え…？あ、はい。すみません」
思わず物思いにふけってしまっていた日名子を、玲佳の声が呼び戻す。
「ちょっと、昔の事を思い出していました」
「な～に、それ。意味深だなぁ～」
好奇心に輝く玲佳を曖昧な笑みで誤魔化した時、ふと店の入り口にいる新しい客に目が行った。
「――――――――…っ！？」
息をのむ。
心臓は倍の速さで鼓動を刻む。
冷や汗がこめかみにじわりと浮かぶ。

これは過去の残像の続きか、それとも現実か。

言葉を失くしてその男を見つめる。
逞しい腕に美女を纏わせたその人こそ、日名子が思い出したくもない結婚生活を送った元夫――――三笠秀史であった。

昔の男・今の男（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません…（汗）

昔の男・今の男

どれだけ時間が経ったのかはわからない。日名子は玲佳が呼びかける声でハッと我に返った。
「…ちゃん？ひなちゃん？大丈夫？」
よほどひどい顔をしていたのであろう。
玲佳がとても心配した顔で覗き込んでくる。安心させようと笑顔を作ろうとして…失敗した。
「…すみません」
「無理して笑わなくていいわ。どうしちゃったの、いきなり」
ちらりと店内に目を巡らせば、元夫はバーの奥にある個室に行ったようだ。こちらからは姿が見えない。ホッと息を吐く。
「どうしたんでしょう。ここ最近徹夜が続いていたから、ちょっと疲れてしまったのかもしれません」
今度はうまく笑えた事に安堵しながら、日名子はその場を誤魔化す。玲佳には以前結婚していた事は言ってあるが、その相手とどんな生活を送っていたかまでは告げていない。
「そう？そういえばさっきから様子が変だったものね。今日はもう帰りましょうか」
まだ飲み始めであったため、ほとんど手つかずのグラスを見ながら日名子は躊躇う。本音を言えば今すぐここから逃げ出したい。けれどせっかく玲佳と一緒にいたのにこんな序盤で帰るのは失礼だろう。
秀史が個室に入ったならばしばらくはここで飲んでも気がつかれまい。まあ、気がつかれたところで、向こうは何とも思わないし接触もしてこないだろうが…そう、元妻とはいえ、自分は秀史にとってそんなちっぽけな存在でしかない。自意識過剰が過ぎるというものだ。
気まずいのはこちらだけ。それならば。

「もう少し…この一杯だけ飲んでからにしましょう。それくらいなら、きっと大丈夫です」
少しだけ気を持ち直して、日名子は薄く笑う。
そう、ただすれ違っただけだ。向こうは日名子の事なんか気が付いてないし気にも留めていない。
それは日名子の気を楽にするはずの事柄なのに、なぜか胸がちくりと痛んだ。

「じゃあまた会社でね」
「はい、玲佳さんも気をつけて帰って下さい」
地下鉄の駅前で玲佳と別れる。日名子は私鉄を使うのでここからもう少し歩かなければならない。
携帯を取り出すと、魁人からの着信が入っていた。リダイヤルでかけ直す。直ぐに耳心地の良い爽やかな声が返ってきた。
『日名子さん？』
「電話くれてたのね。飲んでたから気がつかなかった」
『そんな事じゃないかと思った。電話してきてるって事は、今は一人？家に帰ったの？』
お見通しと言わんばかりの魁人に自然に頬が緩む。年下のくせに、本当に世話焼きで心配性だ。
「今、会社最寄りの私鉄に向かって歩いてるとこ」
『…まだ家までだいぶあるね。途中まで迎えに行こうか？』
「大丈夫だって。ホント、心配性なんだから」
冗談半分で不貞腐れたように言うと、『そんなつもりじゃない』と慌てて釈明するのがおもしろい。先ほどまで元夫の事で落ち込んでいただけに、尚更この雰囲気が優しく思える。
そう、自分には魁人がいる。尊敬できる上司兼友人もいる。そして何より仕事がある。何も落ち込む必要などないのだ。
秀史と別れた時、日名子には何もなかった。本当に何もなかった。

結婚前は仕事に打ち込んでいた時期もあったけれど、いつ元夫と会うかもしれない同じ業種には戻れず、仕事探しも難航した。ようやく就職できた出版社で、日名子は離婚後初めて『自分』の何かを手にしたといえる。

だから今の自分の基盤は『仕事』で、だからこそそこにかける情熱も思い入れも違う。たとえば今、恋人と仕事とどちらかを選べと言われたら間違いなく日名子は仕事を選ぶだろう。魁人もその事は知っていて、『妬けるけれど、それが俺の好きな日名子さんだから』と言ってくれている。

自分は今の自分を誇っていいのだと、日名子は心の中で呟く。

『…どうしたの？なんか、ちょっと落ち込んでる』

「……そう聞こえる？」

『うん』

「なんでもないよ。ううん、なんでもない事に、しなくちゃいけないの」

こんな事でいちいち動揺していられない。

その言葉選びに、魁人が押し黙ったのがわかる。深くつっこむべきか否か悩んで、結局見守る選択肢を選んだらしい。数秒の沈黙の後に届いた言葉は、とても柔らかい優しさに満ちていた。

『日名子さんがそういうなら、それでいい。でも、何かあったら言って。いつだって俺は貴女の味方だし、何があったって必ず貴女を助けるから。それから、全部整理がついたら教えてくれると嬉しいと思う』

「…ごめんね」

『そういう時は“ありがとう”だけでいいんだよ。俺が勝手に思っているだけなんだから』

「……ありがとう。知ってはいたけど、やっぱり魁人っていい男よね」

『貴女限定でね』

「ふふ、嘘つき。程度の差こそあれど、誰にだって優しいの、知っ

てるんだから」
　生来世話好きの彼は誰に対しても優しい。その事で今までの彼女の大半を不安にさせてきたし、勘違いされる事も多かったと共通の知りあいから聞いた。弟妹と弟妹に準じる幼馴染がたくさんいて、その面倒を一手に引き受けていたからこういう性格になったのだという。
『でも、貴女が一番だよ』
「……うん、ありがとう」
　花が綻ぶように笑って、日名子は礼を言う。無性に甘えたくなってきて、ふと我がままを言ってみた。
「ねえ、やっぱり迎えに来てくれる？どこまで行けばいいかしら？」
『うーん…いいよ。そこまで迎えに行く。たぶんそんなに時間かからないから。駅のすぐ傍にコンビニあるでしょ？そこで待ってて』
　魁人の家からこの駅までは結構あるはずだが、出先なのだろうか。けれどこの手の話で魁人が嘘をついた事がないので、日名子は素直に頷いた。
　電話を切って、私鉄の駅までの残りの道を急ぐ。
　コンビニに寄るなら明日のパンを買っていこう。自分の分はあったけれど、魁人の分まではなかったはずだ。彼の好きなシナモンロールを用意して…と少しうきうきしながら考える。
そして、目的のコンビニを見つけて入ろうとしたその時――――
　グイっと腕を掴まれて、日名子は思わず声を上げた。

昔の男・今の男（後書き）

話の流れを見直しているうちにいろいろ変更があって更新が遅れました。申し訳ありません。

感想はじめ、誤字脱字、表現の違いなど気がついた点ありましたら報告よろしくお願いします。

再会

進む方向とは正反対に引かれた力に逆らえず、日名子はバランスを崩す。もつれた足は平衡感覚を失う。危うく倒れそうになったのを引きとめたのも、また同じ彼女の腕を掴む力のお陰であるのは皮肉なことだ。

「随分楽しそうに話しているんだな」

「…っ！」

低い声と男らしい香りに、日名子は背筋がゾッとするのを感じた。あまりの衝撃に言葉を失い、恐る恐る自分の腕を掴む人物の姿を見上げる。予想通りの姿を見つけて、思わず強く目を閉じた。

わかっていた。

自分が忘れるはずはないのだ、この男の———三笠秀史の事を。

「…どうして？」

震える声で問う。

何故彼がここにいるのか。少なくともつい先ほどまでは日名子もいたあのバーにいたはずだ。

「『どうして』？昔の知り合いを見つけたら挨拶をするくらいは常識だろう？」

どこか嘲るような、怒りを押し殺したような響きをした秀史を、日名子は怯えながら見上げる。

これでは七年前と変わらない。いつだって日名子にとって秀史は絶対的存在で、その力に屈していた。それでもなんとか気力を振り絞って言葉を紡ぐ。

「…気が付いているとは思わなかったわ。お連れ様も、いたようだし」

小さな声で告げ、日名子は再び俯く。あの時、バーの入り口で見た秀史の連れの女性を思い出した。

一瞬しか見ていなかったが、彼の男らしい風貌によく似合う、と

ても自分にはああはなれないと思わせる美女だったと思う。そんなどうでもいいはずの事に、胸が針に刺されたように痛むのに、日名子はあえて気がつかないふりをした。
「嫉妬しているのか？」
おもしろがるかのように聞く秀史に、日名子は驚いて顔を上げた。
「…まさか！私は、もうそんな立場ではないわ！」
「こういうのは立場の問題ではないと思うが？」
「……言い方を変えるわ。私はもう貴方の妻ではないし、嫉妬するような感情を貴方にも彼女にも持ちえない」
そう、嫉妬なんかしない。
昔からこの人はこうだったな、と思い出す。話題の女優と、取引先の重役の娘と、そしてモデルもしている従妹と、あえて二人で寄り添って日名子が密かに嫉妬するのを黙って見ていた。けれどそれは昔の事。もう自分と秀史とは関係ないのだ。
自分に言い聞かせるように呟いて、日名子はくすりと笑う。実に自嘲的で、そして疲れに乾いた笑みで。
『日名子さん』と、ふいに爽やかで甘い声が蘇る。少しだけ心が潤いを取り戻す。魁人なら、けしてこちらの心を試すような事はしない。
「私にも、そして貴方にも。もう別の相手がいるのだから、そんな事言わないで。挨拶をするのが目的ならばこれでもう用は済んだでしょう？」
わずかな結婚生活と、その先に待っていた破綻。思い出せば今でも締め付けられるように苦しい。けれど予想以上に穏やかに告げる事ができて、日名子は自分でも驚いた。先ほど彼と再会した時には、自分があまり成長していないと思ったが、案外そうでもないのかもしれない。
「確かに見も知らぬ相手ではないけれど、私たちはもう別れた――――しかもあんな別れ方をしたんだし、あまり長い事一緒にいるべきではないわ。お互いのパートナーにも悪いし」

自分には仕事と、玲佳のような友人と。それから自分を心から慈しんでくれる彼がいる。秀史の評価ばかり気にして一喜一憂していた２３の小娘ではないのだ。
深呼吸をして、姿勢を整える。強く掴まれていた腕を、手首の位置を変えて合気道の要領で振り払った。秀史が驚いた顔をして振りほどかれた自分の手を見ている。腕を引く方向さえ間違わなければ、掴まれた腕を解くのは意外に容易だ。
秀史を驚かせた事にこっそり気を良くしながら、日名子はキッと秀史を見据えた。
こんな些細な事でさえ、自分は七年前とは違う。小さな事でもそれに気がつかされて、見失いかけていた『自分』の自信を支えに立つ。
「ＭＩＫＡＳＡの社長になったのでしょう？こんなところで揉めていたら誰に見られるかわからないわよ。早くバーに戻ったら？あの女性が待っているんじゃない？それに、私だって待ち人があるの」
悠然と告げるのは彼の立場を匂わせる忠告。そう、社会的立場は日名子より彼の方がずっと重い。それがわからないほど愚かではないはずだ。
結婚している間は何度も彼のその立場に泣かされた元妻は、別れて初めてその立場に感謝をする。
強く見据えた視線の先で、秀史が茫然と日名子を見ている。しかし、すぐに彼は憎悪にも似た表情に切り替え日名子を睨みつけてきた。
「――――――許さない」
「え？」
いきなり言われた言葉に付いていけず、日名子は戸惑いに表情を崩す。
「許さない。私の子供を死なせた君が、他の男の子を産むなど…私

は許さない」
　秀史の呪詛にも近い言葉に日名子は顔を強張らせ叫ぶ。
「な…っ！なんて言い方…！！」
　つい数分前までの余裕などどこにもなく、急所を突かれて日名子は青ざめる。
　そんな彼女の様子に気をよくしたのか、秀史はふっと歪に唇の端を上げた。
「事実だろう？あの時君が軽率な行動さえしなかったら、私の子供は死なずに済んだんだから」
「……！！だからって…だからって……っ！！」
　両手で顔を覆い、苦痛に襲われながら日名子は抗議の声を上げる。けれど心の悲鳴は何一つとしてまともな文章になって外には出てこない。ただ悲痛な嗚咽となって日名子の視界を曇らせる。
　優越感に満ちた、冷たい声が止めを刺した。
「私はけして君を許さない———君には、償いをしてもらう」
「いやあああぁあああぁあ！！！」
「日名子さん！？」
　自分で自分を抱きしめ、半狂乱になりながら叫ぶ日名子を、横から誰かが抱きしめる。秀史かと思って抵抗する。やけになって振り回した手が抱きしめる相手の顔に当たった。
「日名子さん！日名子さん！！落ち着いて！俺です、魁人です！！」
　何度か繰り返されて、ようやくその爽やかな声に日名子は我に返る。
「かい…と？」
「はい、俺です。……遅くなって、すみません」
　爽やかで優しい声。どこまでも包み込むような真綿の温かさをもつ腕の中。日名子は脱力して彼の胸に頭を預けた。

意識が途切れる前に見渡した視界の中には、秀史という名の悪夢は見えなかった。けれど眠れば必ず再会するであろうとわかっていた。逃げたい――――でも逃げられない。

考えたくもない絶望に、日名子は闇に沈んでいった。

再会（後書き）

…なんというか、秀史がどうしようもなく嫌なヤツだと書いてて自分でも呆れました。どうするのあんた…

そして魁人君登場…ですが、次回は過去に飛びます。
よろしければお付き合いください。

二人の結婚（前書き）

予告通り過去編です。
日名子と秀史の重たい過去のお話。

二人の結婚

秀史と日名子は、会社の上司と秘書という関係だった。
主に輸入品を取り扱う株式会社『ＭＩＫＡＳＡ』は、その業界ではかなり名が知られている。そして、その名の通り秀史の一族が経営する会社であり、当時秀史は２０代後半にして常務という大役を務めていた。
有名短大を奨学金で卒業した後、『ＭＩＫＡＳＡ』の秘書室勤務となった日名子とは5歳差。秀史の第一秘書に指導を受けながら頑張る日名子にとって、やり手で年上の男の魅力をもった秀史は最初から眩しい存在だった。そんな日名子の憧れに気が付いていたのであろう。二人が深い仲になるのもそう時間がかからなかった。
幸せだった。
日名子にとって秀史は全てで、秀史のためにならなんだってできた。忙しい秀史は恋人に尽くせる時間は多くなかったが、寂しくても一言も愚痴を言うことなく尽くし続けた。
そんな、ある日。日名子は毎月来てしかるべきものが来ていない事に気がつく。
まさかと思ったが、薬局で買ってきた簡易妊娠測定キットは陽性。それでも信じられなくて訪れた産婦人科でも妊娠を告げられれば事実からは逃れられない。
悩み、悩んだ末…日名子は秀史に妊娠を告げる事を決めた。

「妊娠？」
訝しげな秀史の言葉に、日名子は無言で頷く。その表情は青ざめていた。
避妊はしていたが万全とはいえない。時折情熱に身を任せて安全日だからと気を抜いていた時もあった。

「病院には？」
「…先週、行きました。１１週目だそうです」
ふるえる日名子の声に、秀史はしばらく沈黙する。それから重い声で尋ねた。
「それくらい前に避妊をせずした覚えはないが…」
「…っ！」
暗に『本当に自分の子か？』と尋ねられていると知って、日名子は青ざめた顔を更に険しくする。大声を出す事をなんとか我慢して、絞り出すように説明した。
「……妊娠の週の数え方は、最終月経から数えるんだそうです。だから、１１週目と言っても実際に宿った日とは半月くらい差があるんです」
「だが、私は安全な日にしか…」
「安全日なんて、本当はないそうですよ。どんなに定期的な人でも、生理の周期はバランスを崩す時はあるんです」
生理が終わる頃なら大丈夫と考えているものも多いようだが、実際は僅かながらも生理直後でも妊娠する可能性はある。
どうしてこんな事を説明しなくてはならないのかと、羞恥に耐えながら日名子は恋人の顔を見上げた。
「……お気になさらないでください。面倒をかけるつもりはありませんから」
弱々しく微笑む。全面的に喜んでもらえるとは思わなかったけれど、まさか疑われるとは思わなかった。それはひどく悲しく辛い現実であった。
「ちょっと待て。それは、堕胎するという事か！？」
「まさか！！」
秀史の声に、日名子は初めて耐えていた大声を上げた。
この人にはきっとわからない。生理が来なかった事がどれだけ不安で、夜も眠れなかったか。そして不安ながらも、昨日病院で妊娠を告げられた時、小さなエコー写真にどれほど感動したかも。

「せっかく私の中に宿ってくれた命を粗末にする気などありません！貴方が堕胎しろといっても私は絶対にしない！」
まだ平らなお腹を抱えて訴える。視界が白く滲んだ。
目の前の人物を睨みつけるように、そして縋るように日名子は叫んだ。
「ＭＩＫＡＳＡの力を当てにする気も、貴方に依存して生きていく気もない。相続放棄や証明書を書けと言うならそうする。だから私たちに構わないで！！」
「そんなわけに行くか！！」
秀史の低い声が部屋中に響き、驚いて日名子は固まった。
低いため息が聞こえて、少し後に伸ばされた少しごつごつした指が日名子の視界をクリアにしていく。
「君の子でもあるが私の子でもある。私も親としての責任を果たさなくてはなるまい」
「……え？」
「結婚しよう」
甘いはずの言葉は少しも甘くなく、日名子の心を重たくする。
つまり、それは子供のための結婚であり、日名子を愛しているからではないという事だ。責任をとるためだけの結婚だ。
「貴方の手を煩わす気などないと言っているでしょう？無理して結婚なんて…してもらわなくていいわ」
「勇ましい事を言ってはいるが、一人で子供を育てられると思っているのか？いくら君が優秀な秘書であっても、それはいささか非現実的だ」
「……そんな、事…」
「わからないほど愚かではないと思うけどね」
言葉を重ねられれば重ねられるほど、日名子の心は重たさを増していく。涙として外に流しだす事もできない悲しく冷たい水が体全体を濡らしていく。
ああ、でも。一人で子供を育てていくことがどれほど大変かとい

う事もまた事実だ。母子家庭で育った日名子は、誰よりその事をよく知っていた。
他の皆のように母に甘えられない、一人きりの事がほとんどな寂しい生活。あんな思いを我が子にはさせたくない。
結婚しなくてはならない。それがどんなに虚しい結婚であっても、子供には両親揃っていてあげたい。

「…わかり、ました」

承諾の声は、花嫁に似つかわしくないほど、ただ虚ろに響いた。
その僅か1ヶ月後、日名子と秀史は夫婦となる。そしてそれは――けして周りに歓迎されたものではなかった。

二人の結婚（後書き）

すみません…1話で終わりませんでした（汗）ついでに言うと2話でも終わりません…過去編は3話予定です。おそらく（え）

お気に入り登録している皆様本当にありがとうございます！
拙い話ですし、なんだかどんどん話が重たくなっていってますが、精一杯がんばりますのでよろしくお願いします！！

悪意と献身

結婚後、日名子はほとんど強引に仕事を辞めさせられ、秀史の実家に移り住む事になった。

都内ではなかなか見られない屋敷の大きさに戸惑い、尻込みする日名子を、秀史は「慣れてもらわなければ困る」と一言で切り捨てる。反論したい事はあったけれど、最近の秀史はとても忙しく、余計な口論で気を煩わせる事が嫌で言葉を飲み込んだ。言葉の通り、自分が慣れればいいだけの話だ。

心の底から慣れる事はできないだろうが、慣れているふりくらいは自分にでもできるにちがいない。

しかし、そんな日名子の決意も姑である曜子の前では役に立たなかった。

「最初に言っておきますが、私は貴女を三笠の嫁とは認めません。お腹の中の子はＤＮＡ鑑定を受けてもらいますから」

秀史がいない平日。日名子は曜子にそうはっきり告げられた。

「そんな…」

「反論は許しません。まったく…あの子には同じ階級の相応しい御令嬢と結婚してもらおうと思っていたのに。よりにもよって貴女のような片親の私生児を遊び相手に選び失敗するなんて」

心底汚らわしいといった様子で、曜子は日名子と目も合わさない。

『失敗』と。そう断定された事が心の傷に刃を突き立てる。それだけじゃない。『片親の私生児』。その台詞も深く日名子を傷つけた。

「確かに戸籍上は私生児かもしれません…。でも、婚約期間中に父が死んだからそうなっただけで…私は……」

日名子が高校生の時に亡くなった母は、日名子にいつも片親であ

る事を詫びながら、それでも『貴女はお母さんとお父さんに愛されて生まれてきた子なのよ』と告げてくれた。そんな母の愛を真っ向から否定する言葉に日名子はふつふつと怒りが湧いてくる。
それも曜子には気に食わなかったようだ。
「なんなんです、その反抗的な目は。まったく、育ちが知れるというものです」
ツンと顔を背けて、それから当然の事のように言われた。
「万が一、お腹の子が秀史の子であると証明されたら、子供は私が育てます。貴女を母親とも思わないようにしてあげなければいけませんね」
「な……っ！」
秀史に責任のための結婚を申し込まれた時、これ以上の絶望はないと思った。けれど、その曜子の言葉はその時の絶望すらあっさりと凌駕する。
何より大事に、愛おしく思う我が子を自分の手で育てられない。我が子に母親と認めてすらもらえない。そして曜子はそれが当然の事だと思っている。
「そんな…」
顔色を失くして座りこむ日名子を歯牙にもかけず、言うべき事は言ったと、曜子は踵を返した。

その夜、あまりの不安に日名子は返ってきた秀史にさりげなく願った。
「秀史さん。この子と三人で、どこか小さな家で過ごす事はできないかしら」
「何を言っているんだ、いきなり」
寝耳に水、というように秀史は眉を顰める。
「ここは私が生まれ育った屋敷だし、我が子にはできれば同じここで育ってほしい。母さんは今から孫の教育をするんだと張り切っている。君はそんなささやかな希望を打ち砕くのか？」

「それは…」
日名子は俯いて唇を噛む。曜子に具体的に何を言われたか、母を愛している秀史には伝えたくない。けれど、このままでは自分の子供が奪われてしまう。
どう告げていいのかわからず、それでもなんとか言葉を探して訴える。
「自分の子の事は、できるだけ母である私がしてあげたいの。もちろんお義母さまの手もお借りするだろうけれど、ここにいたら私の役割がなくなりそうで…」
「馬鹿な事を言わないでくれ。そんな事があるはずないだろう。そんな些細な不安で煩わされるのはご免だ。しっかりしてくれないと困る」
仕事が忙しいのもあるのだろうが、いつも以上にイライラとした口調で話を断ち切られ、日名子はただ言葉を飲み込み、一人バスルームで涙を流した。

曜子だけではない。秀史の親戚たち———とりわけ彼の従妹であるエリは日名子に異常なくらい冷たく接した。
モデルもしている彼女はとても美人で、プロポーションも素晴らしい。最新のファッションスタイルに身を包み屋敷を歩く姿は実にさまになっていて、未だに屋敷の広さに圧倒されている日名子とは雲泥の差であった。
「貴女が秀史の奥さま？ホント、叔母様が言っていた通り育ちが悪そうで器量も悪いのね」
日名子を上から下まで観察してから、嘲るように笑う。そんな意地悪な表情さえ美人なのだから悔しい。そしてその瞳には、まぎれもない嫉妬の光が宿っていた。

秀史が傍にいるとき、エリはまるで恋人同士のように傍によって腕を組んだり、秀史に甘える動作をしたりする。
古い使用人の話では、幼い頃からずっとの事で、エリは秀史に恋心を抱き続けているらしい。嫉妬深くて、秀史と恋人の仲を引き裂いた事も一度や二度じゃないそうだ。
一方秀史はそんなエリをまるで実の妹のように思っていて、甘える事は許していても恋愛の対象としては見ていない。彼女が恋人たちに嫌がらせをしても、可愛い妹が兄を盗られるのが嫌に思うのと同列にしか思っていないだろう。むしろそんなエリの我儘も従兄妹して可愛く思っている節が見受けられる。
親戚とはいえ立ち入れない絆を感じて、日名子は表情暗く俯いた。
「おまけに自信もないのね。まあしょうがないわ。だって本当に貧層ですもの。言っておくけど、子供が産まれたらとっとと離婚してちょうだいね。秀史は貴女と結婚した事を後悔しているし、私の大切さにも既に気が付いているんだから」
毒々しい表情で日名子を睨むと、勝ち誇ったように笑う。反論しようにも、責任のために結婚した、本当の意味で愛されていない妻にはどんな反論もできなかった。
こんな毒だらけの蠍女に、弱みだけは見せたくない。涙だけはこぼすまいと、日名子は必死に唇を噛みしめた。

それからも、エリはなんだかんだと理由をつけて、最低週に3回は屋敷を訪れ日名子を貶し続ける。
曜子にいたっては同じ屋敷にいるのだからもっと多い。時には存在そのものを無視される事もあったが、その方が日名子は楽だと思っている事に気がついてからは、毎日呪いのように悪態を吐かれ続けた。
秀史は連日仕事が忙しくて、ゆっくり話をする時間も取れない。

忙しい秀史を嫁姑の問題につき合わせる事もできなかったし、せめて自分が傍にいる間はゆっくりと休んでほしくて、日名子はすべての混沌を飲み込んで、ただ秀史に尽くし続けた。

悪意と献身（後書き）

過去・中編です。
やってまいりました、的な嫁姑問題。
生まれた子供を奪うようにして育てるっていうと、ハプスブルク家のエリザベートとゾフィー皇太后の関係が個人的には頭に浮かびます。自分の愛する娘が敵対する姑と同じ名前…て嫌だよなぁ…

そして秀史に訴えられない日名子さん。彼女は基本的に「よい子」なので、人の悪口を言えない子です。
そういう子ゆえ、溜めこみます。じりじりじり…と。

それでは、また。次話もお付き合いいただけたら幸いです。

破滅（前書き）

いつもより長めです。

破滅

日に日に少しずつ大きくなっていくお腹が愛おしい。
姑と親族に受け入れられず、なじむ事もできない屋敷の中で、愛する人との結晶だけが日名子にとっての希望であった。
そう、どんなに理不尽な状況に晒されようと、話を聞いてもらえなかろうと、日名子は秀史を愛していた。
「日名子」
「秀史さん」
「こんなところで寝ていたのか。風邪を引く」
珍しく早く帰ってきた秀史が、ソファーで眠る日名子に膝かけをかけながら告げてくれる。
「ありがとう。お帰りなさい。あのね、今日病院で、腹部エコーの写真をもらってきたの」
「超音波写真というヤツか…いい、後で見せてもらう」
知らず深いため息を吐く秀史を見て、日名子は哀しみに目を細める。
責任からの結婚とはいえ、お腹の子の様子を話しても嬉しそうではない。どういう風に育てたいという話はするが、たまに日名子のお腹に手があたるとハッとしたようにすぐ手を退けていた。
そんな姿はとてもとても哀しかったけれど、日名子は秀史を信じていた。
秀史は、傲慢に見えても本当は優しい人だ。きっといつか、この子の事を受け入れてくれるに違いない。

それは、もう少しで安定期に入る、そんな時期の頃だった。
「秀史！」

相変わらずエリは週に3回は屋敷を訪れ、秀史の名を呼んでは少しでも彼を独占しようとする。けれどそんな彼女が、ある日廊下の隅で泣いているのを日名子は見てしまった。
哀しみに顔を歪め、堪えようとする涙も重力に耐えきれず零れおちる。噛みしめた唇の震えも、握る両手の白さも、彼女が本気で泣いている事を示している。
衝撃的だった。
エリのように誇り高い女性が、こんないつ人に見られてもいいところで泣くとは思わなかったし、それ以前にこんな必死で何かに耐えるような泣き方をするとは思っていなかった。否、むしろ誰よりプライドの高いエリに相応しい泣き方だったから、日名子にはこれが本気なのだとわかってしまったのだ。
エリのような女性を本気で泣かせる原因は何だろう。そういえば、今朝秀史が彼女に何かを言っていた気がする。何か関係があるのだろうか。
いずれにせよ気まずくて、昇ってきた階段を降りようと踵を返そうとした瞬間に呼び止められた。

「待ちなさないよ」

振り返れば、エリが真っ赤な目でこちらを睨んでいる。
「黙って行くなんて、本当に根性が悪い女ね」
「…ごめんなさい。でも、私では慰めにならないと思って…」
それは限りなく事実で、エリが日名子に慰めを求めるとも思えなかったし、今は一人になりたいだろうという配慮もあった。しかし、エリは日名子にそうされた事が気に食わなかったようだ。
「はんっ！秀史の奥さまはお優しい事！そうよ！あんたなんか全然慰めになんかならないわ、この疫病神！！」
怒鳴られて眉を顰める。色々な事を言われてきてだいぶ耐性も付いているが、未だに悪意のある言葉を受けるのは気持ちがよくない。

でも、いつも以上にこれがエリの唯の八つ当たりだという事もわかっていた。
気持ちを落ち着けるために一つ深呼吸をする。けれど、不機嫌な女王様にはこんな動作一つでさえ発火装置だった。
「余裕ぶった顔をして本当にムカつく！子供ができたから結婚してもらったお情けの妻のくせに！」
そんな事は重々わかっている。
言い返してやろうかと思ったが、自分で認めたくなかったし、他人に付きつけられるとまたいつもと違った痛みが襲う。
哀しげに目を伏せて、日名子は黙って嵐が過ぎるのを待った。

けれど、嵐は過ぎ去る事を許してくれなかった。

「あんたが憎い！あんたが許せない！あんたなんか死んでしまえばいい！！」
エリは日名子に詰め寄りながら叫ぶ。そして叫んだ後、しばらく考え込むようにしていたかと思うと…ふと真顔になった。

「……そうよ。あんたが死ねばいいのよ」

その表情を見て日名子はゾッとした。
狂っている。
逃げなければいけない。
――――思った瞬間には遅かった。
「……っ！？」
一瞬身体が宙を浮く。視界が暗転して、全身に痛みが走った。不定期に自分の体が叩きつけられる。そういえばここは階段であった。
お腹が痛い。
何かが下から流れていく感触がする。

助けて———助けて、秀史さん……助けて……！

切に願う声は届かない。

滑り落ちていく意識の中で、エリの歪んだ笑顔だけがハッキリと形を残していた。

目が覚めた時、日名子は白い壁に囲まれた病室にいた。

全身の痛みに耐えながらお腹に手をあてる。

誰から何を言われる前に、自分の中に宿っていた希望がなくなっている事に気が付いていた。

「日名子…目が覚めたのか」

どうやらここは個室のようだ。人の気配に日名子が顔を動かすと、医者と秀史、それから曜子とエリが病室に入ってくるところだった。

「気分は悪くありませんか？」

悪くないわけがない。

心の中で吐き捨てるように呟く。

最悪な思いで医者の診察を一通り受けると、病室には家の者だけが残された。

重たい、重たい沈黙の後で、秀史が口を開く。

「踵の高い靴を履いていたそうだな」

「……は？」

思いもよらない言葉を言われ、日名子は唖然として夫を見る。苦しそうな夫の向こうで、曜子はしかめ面をし、エリは何故か得意げな顔で笑っていた。

「『階段には気をつけて』って言ったのに、たまにはお洒落をしたいからってハイヒールなんか履くからいけなかったのよ」

訝しげに眉を顰める日名子に、エリは告げる。いかにも『残念だった』という嘘の仮面を纏って。
「何を言って…私は、ハイヒールなんて履いていないわ」
妊娠がわかってからというもの、日名子は常にローパンプスを履いていた。それは秀史や曜子も知っているはずなのに、何故そんな結論になるのだろう。
「嘘を吐いても無駄だ。君が倒れていた時履いていたのは、ハイヒールだと、家の人間みなが見ている」
「…っ！？」
秀史からは見えないところで、エリの表情が更に醜く歪む。
「なんて軽率な…君は一体何を考えていたんだ…」
怒りを絞り出すような秀史の言葉に、日名子は何を言っても無駄なのだと知った。
絶望が身体全体を包む。
エリに突き落とされ、何より大切であった我が子を失い。
そして彼女が築き上げた嘘を夫は信じ、自分の言葉には耳を貸そうともしない。
虚ろな瞳から涙が零れおちる。
そんな日名子に何を感じたのか、秀史は怒りを押し殺したまま、黙って病室の外に出て行った。エリがそれを追う。出る直前に振り返った顔は、優越感に満ちていた。
曜子だけがまだ黙って病室にいた。室内には再び沈黙が落ちる。
やがて、曜子がおずおずと口を開いた。
「……日名子さん…」
「離婚届をください」
曜子の言葉を遮って、日名子は言った。けして曜子の方は見ない。

光を失った瞳で窓の外を見て、お腹に手をあてたまま、日名子は告げる。

もう、終わりにしよう。

終わりにしたい――――何もかも。

「離婚させていただきます。お義母さま…いえ、曜子さまも秀史さんもそれをお望みでしょう？」

ぎこちなく首を動かして、曜子を見る。曜子は、日名子の表情を見て何故か息を呑んだ。歪められた眉は日名子に対しての嫌悪感だろうか。でも、今まで向けられたものとは少し質が違うように思える。

でも、それも日名子にはどうでもよい事だった。

心の中に渦巻くのは、絶望と――――怒り。

自分の気持ちを優先させ、けして人道的でない方法でもって自分から我が子を奪ったエリ。

日名子という存在を受け入れず、自分の居場所と存在意義を認めてくれなかった曜子。

責任から結婚を申し込み、我が子を顧みず、そのくせ自分を責めた秀史。

そして…我が子を守れなかった、自分。

全てのものに怒れて、どうにでもなってしまえばよいと思う。ドロドロになって醜く澱んだ心は自分でも制御ができない。

だから――――全てを終わらせる。

「終わりにしましょう、全部」

日名子がそれを告げてもなお、曜子は何故か病室に佇んだままであった。

そして翌日。
曜子が持ってきた離婚届に記入をして、日名子は病院から姿を消した。

破滅（後書き）

…と、いうわけで過去編はひとまず（え）終了です。
誤字脱字などあったら報告お願いします。

２３歳（前書き）

時間軸、現代に戻りました。

23歳

目が覚めた時、日名子は自分のベッドの上にいた。
隣の部屋から声が聞こえてくる。重たい頭を起こしてそちらを覗けば、魁人が誰かと電話で話していた。
「とりあえず安静にしておけばいい？ああ、大丈夫。そこのところはよくわかってるから」
穏やかな表情は電話の相手と相当親しい事を示している。
誰だろう、とまだハッキリしない頭で思う。けれど、それすらも本当はどうでもよかった。

『許さない。私の子供を死なせた君が、他の男の子を産むなど…私は許さない』
『君には、償いをしてもらう』

意識を失う前、再会した秀史の言葉を思い出す。胸が締め付けられるように痛い。そして、理不尽な言葉に忘れていた怒りが蘇る。
「何が――――償い…！」
確かに、自分はあの時エリの悪意から我が子を守れなかった。その事を後悔しなかった日はないし、今でも思い出せば泣きたくなるほど苦しくなる。
けれど、その事を秀史に責められる筋合いはない。彼に対してほんの僅か――――小指の爪ほどの責任はあるかもしれないが、ならば自分はどうだったのかと逆に問いたい。
仕事と言って碌に家に居もせず、検診にも付き合わない。子どもの養育は母に任せると言い切り、自分の要望ばかりを通して妻の意見など聞きもしなかった。
挙句の果てに、妻を突き落とした女の嘘を信じ日名子を責めるような碌でなしだ。

どこを取って見ても、日名子が責められる謂れなどありはしないだろう。考えただけで腹が立つ。

でも――――

「あんな風に言うって事は、少しは愛してくれてたのかな…あの子の事」

再びベッドの上に横になりながら、日名子はポツリと呟いた。

あまり話題にもさせてもらえず、手を退けつづけられていた秀史との子。まるで受けいれてもらえていなかったようなあの子の死に、秀史があんなに怒るとは予想外だった。

少しでも、愛されていたのだろうか。

誠に不本意ながら、それは日名子にとって嬉しい事だった。少しだけでも、産んであげられなかったあの子が報われる気がする。そして、惨めで哀しかったあの頃の自分も、認めてもらえるような気がした。

愛していた、あの子の事も、秀史の事も。心の底から愛していた。だからこそあの結末は哀しすぎた。

今なおあの過去から逃れきれていない。まるで氷漬けされたかのように、あの頃の苦しみは閉じ込められたまま。それでも、少しずつ自分は前進しているのだと思いたい。

だから、今度はけして秀史に屈してなるものか。日名子は決意を新たにする。

「日名子さん、起きた？」

いつの間に電話が終わったのか、魁人が隣の部屋から顔を出す。

栗色の柔らかなくせ毛。背が高くて体つきもガッシリした方で、男らしい容貌だが目元が彼の気性の優しさを示している。父親が外国の人らしく、彫が深い整った顔立ちをしていた。

魁人は大きな手で日名子の前髪を払い表情を覗きこむ。まるで幼子にするような仕種だが、それが妙に心地よくて日名子はされるが

ままにする。
「…身体は大丈夫そうだね」
「ごめんね、心配かけて」
小さく謝ると、彼はふわりと笑んで首を振る。年下だというのに、甘えてばかりの自分が恥ずかしい。
「雑炊作ったんだけど、食べるでしょ？」
「うん、欲しいかも。でも、雑炊なんてまるで病人みたいね。身体は元気なのに」
苦笑しながら日名子は言う。
確かに自分があの時倒れたところだけを見れば病人扱いされても仕方がない。けれど、それは精神的なものだけで、身体としては至って元気なのだ。
けれど、魁人はあっさりと告げた。
「精神的にキツイ事があったら、身体は元気でもがっつりなんて食べられないでしょ。でも、何か口にしないともっと元気がなくなる。だから、病人食でいいんだよ」
サラリとそう言う魁人を驚きながら日名子は見つめる。
「母さんの受け売り。無理して食べる必要はないけど、食べられるなら何か口にした方がいいって。『胃と心に優しいモノを作ってあげなさい』て今言われてきたとこ」
どうやら先ほどの電話の相手は母親らしい。魁人は両親を尊敬しているらしく、端々でこうやって両親の言葉が出てくる。
愛されて育った事がよくわかる青年だ。早くに家族を亡くした日名子としては羨ましく、そして少し妬ましい。
「それで、雑炊？」
「そう、愛情たっぷりのね。日名子さんが好きなとろとろ卵もちゃんと入ってる」
気を楽にするようにお茶目に魁人が笑う。
「ありがとう。魁人の料理なら病人食でも絶対おいしいわね」
魁人の料理の腕は絶賛すべきもので、女として日名子が負けるく

らいうまい。店でも開けそうな腕前だ。
予想通り、受け取った雑炊はほっぺが落ちそうなほどのおいしさで、自然と疲れた心まで癒してくれそうだ。思わず顔が綻ぶ。
そんな日名子を、魁人は嬉しそうに見つめていた。こんな表情をしていると、彼がまだ社会人になりたてのまだ若い青年なのだという事を思い起こさせる。

２３歳…か。

日名子が流産し、秀史と離婚したのと同じ年だ。全てに絶望して、再スタートした年でもある。
生きていくだけで必死だった。
精神的にも身体的にも安定とはほど遠くて、何度死のうと思ったかしれない。
その度に、母の事、写真でしか知らない父の事を考えた。生まれる事のできなかった我が子の事を思った。離婚直後はいつ死んでもいいと思っていたが、時を経るにつれ、死ぬ事だけはできないと思うようになった。
たとえ数カ月お腹の中にいただけであっても、自分は確実にあの子の母親であった。そして一度母としての気持ちを知れば、我が子が死ぬという事が親にとってどういう事かわかり命を粗末にできなくなった。力の限り生きなければならないと…心の底からそう思う。
ただ、目の前の青年を見ていると、あまりに自分たちの２３歳が両極に位置している事を感じてしまって、なんだか少しだけ切なくなった。

２３歳（後書き）

過去編が終わり、現代に移りました。
といっても、物語が進行するのは次話くらいからでしょうか。

できるだけ早く投稿できるよう頑張ります。
読んでくださってありがろうございました。

悪魔の微笑み（前書き）

更新が遅れてほんとうにすみません！！

悪魔の微笑み

３日後、日名子は突然上司である花木に呼びだされた。
「水臭いな、本庄くん」
「…？何のことですか、部長」
訝しげに問う日名子と対照的に、花木は随分ご機嫌だ。
そして上機嫌のまま告げられた台詞に、日名子は愕然として言葉を失くす。
「三笠社長と知り合いだったら、早く教えてくれていたらよかったのに」
「！？」
まさか職場で聞くと思わなかった名前に、日名子は青ざめて花木を見返す。中級に属する出版社と『ＭＩＫＡＳＡ』は関わり合いがほとんどないはずだ。だからこそ、日名子はここを職場に選んだ。だのに、どうしてここで秀史の名前が出てくるのだろう。しかも、日名子と知り合いだと知っているという事は――――
「先ほど三笠社長が来てね。教えてくれたんだ。応接室で待っていただいているから、お相手さしあげてくれるかい？」
「……え…」
からくり人形より拙い動きで、愕然としたまま日名子は問い返す。

何故。
どうして。

疑問と共に蘇るのは、７年ぶりに再会したあの時の言葉。
『君には、償いをしてもらう』
これが、彼の言う『償い』の始まりなのか。嫌な予感に冷や汗が湧きでる。
叫び出したい言葉は喉の奥で閊えて音にならない。ただワナワナ

と震える身体と心を必死に抑え込もうと努力する。
「知っていると思うが、三笠社長は最近うちの大手株主になってね。どうしてかと思っていたら、君がいたからだったんだね」
にこにこ顔で告げる花木の言葉に、日名子は気を失うかと思うほどの衝撃を受ける。
株主？まさかと思うが、花木が嘘を言っているとは信じられない。株主にまで目を向けていなかったのは迂闊だった。けれど、どうして彼が自社の株を買っているなどと想像が着くだろう。
拳を白くなるまで握り締めて、唇を引き結んだ日名子の様子にようやく気がついたのか、花木が不思議そうに尋ねる。
「どうした、本庄くん？気分が悪いなら、三笠社長に挨拶した後そのまま早退してくれて構わないよ」
忙しい最中で花木がこれだけ言う事は滅多にない。相当機嫌がいい上に、秀史はそれだけ重要な人物なのだろうと想像がつく。
日名子は震える心に渇を入れようと、もう一度強く拳を握りしめる。それから、大きく深呼吸をした。目をきつく閉じてからキッと強く開く。
「…わかりました。挨拶をしてまいります」
対峙しなければならない相手を思えば心が挫けそうになる。
けれど負けられない。つい先日、けして秀史には屈しないと誓ったばかりではないか。
日名子はもう一度大きく息を吸うと、意を決して花木の元を後にした。

「失礼します」
日名子の気配に、窓から外を眺めていた秀史が振り返った。
相変わらず威圧感のある男だと日名子はこっそりため息をつく。
広い肩幅に逞しい肢体。アルマーニのセンスのよいスーツにネク

タイ。鋭く先を見据える切れ長の瞳。何よりその堂々とした佇まいと醸し出す雰囲気が、彼が大企業の社長である事を示している。
「3日ぶりだな」
「…そうですね」
何を思っているのか、にやりと笑みを浮かべる秀史に、日名子は硬い声で応える。
全くもって気に食わない事に、三笠秀史という人間はこうしたどこか傲慢な態度がよく似合う。他の人が行ったらいけすかない態度も、彼にかかればいっそ魅力的に感じるのだから性質が悪い。
一瞬だけその魅力にぞくりとしてしまった自分を見てみないふりをして、日名子は自分の内から彼に対する怒りを呼び起こす。少し意識を向ければ、それは湯水のように溢れ出て日名子の敵愾心に味方した。
「聞けば、うちの社の大手株主だそうで。何のつもりかは知らないけれど、御贔屓いただけてありがとうございます」
「なに、優秀な社員を引き抜かせていただくんだ。これくらいは相応というものだろう？」
「……どういう事です？」
余裕綽綽といった秀史の態度に、日名子は眉を顰める。
秀史と日名子の距離は約3メートル。応接室の端と端にいると言っていい位置なのに、離れていても感じる秀史の威圧感に飲まれそうで、日名子は懸命に彼を睨みつける。
そんな日名子を見て、秀史はフッと笑う。
まるで小動物を見るような一種の憐憫をもった瞳に、日名子は屈辱で真っ赤になった。
「新しい雑誌を作るそうだね。君もメインになって、随分力を入れてるそうじゃないか」
「……なんで今その話が？」
突然ふられた話題に、日名子は用心深く問い返す。新しい雑誌というのは、日名子と玲佳が手掛けている女性向けの雑誌の事だろう。

株主ならば知っていてもおかしくないが、今この瞬間に話題に出てくるものだとは思わない。
「主となって投資させてもらうのが私だからね」
「…は？そんな、一株主だけで話が進むわけがないでしょ！？」
「でも、事実だからね。そうだとしかいいようがないな」
秀史の言っている意味がわからなくて、日名子は困惑の表情を浮かべる。雑誌の予算は社の総予算の中から割り振られているはずだ。他の予算など――――献金などなかったはずだ。まさか、強引に秀史が手を回したのか。
唖然として日名子は秀史を見る。

「君の大切な雑誌への投資は、君の身柄と引き換えだ」

言われた言葉の意味がわからなくて、日名子は思わず聞き返す。
「私の身柄と引き換えって…どういう事？」
「決まっているだろう？君には仕事を辞めて私のもとに戻ってもらう。それが、投資の条件だ」
油断なく浮かべられた笑顔に、新たな怒りが沸き起こってくるのを感じた。
「そんなの、ありえないわ！！」
「そう思うなら思っていればいい。その代わり、一生雑誌は発売されないだろうけれど」
浮かべられた笑みはどこまでも傲慢で自信に充ち溢れている。獲物を狙う猛獣の目だ。一度狙いを定めた獲物はけして逃がしはしない。その視線が語っている。
秀史は、どんな強引な手段を用いても自分の言う通りに事を進めるつもりでいる。
目の前で言い渡された事が信じられなくて、日名子は目を見開いて秀史を見つめる。
深く――――昏い瞳が日名子を見つめ返す。かつて焦がれた瞳は、

こんな色だっただろうか。

言葉を失くした。
まるで、魔に魅入られた娘のように。
日名子の視線の先で、悪魔が微笑む。

「償いの始まりだ、日名子。もう一度私のものになって、私の子どもを産むんだよ、君は」

それは、とても魅力的な、うつくしい笑顔だった。

悪魔の微笑み（後書き）

…難産でした。筆がまったく乗らず…
一週間以内に一回とか嘘言ってすみません。しかもなんか気に食わないのでそのうち改稿するかも（汗）
でもとりあえず物語が動き出した感じなので、少しは進めていきたいと思います。

危機

一体秀史の中で何が起こったというのだろう。

その日、日名子はシャワーを浴びながらあまりに強烈だった昼の事を思い出していた。

あれから直ぐに花木が来て、秀史との話はあのまま終わってしまった。あやふやな状態で置き去りにされた居心地の悪さを感じると共に、それでよかったとも思う。

連絡先だと渡された現在の名刺は、帰ってきてすぐゴミ箱に捨てた。あのまま秀史の話を聞き続けていたら自分自身がどうなっていたか、日名子にはわからない。

シャワーを頭から浴びて、今日の出来事を全て洗い流したいと願うのに、どれだけ水を浴びても秀史の言葉は、彼のうつくしい笑みは、彼女の中から離れてくれなかった。

苛立ちに勢いよくシャワーの蛇口を閉める。長い髪から水気を絞ってバスルームから出ると、疲れた顔をした鏡の中の自分と目があった。

体型は、年の割には崩れていないと自分でも思う。でも、その表情はとてもじゃないが３０になったばかりの女とは思えない。

心労が重なっているからだ、とため息を吐いた。徹夜が辛くなってきてはいるけれど、ついこの間までの自分は鏡の中でも自分が誇らしく思えるほどエネルギッシュだった。

忌々しい。

心身の全てをかけて彼に対抗しようとしているのに、秀史は日名子の決意をあざ笑うかのようにあっさりと彼女を揺さぶる。

どうして、彼は自分を放っておいてくれないのだろう。

憎まれる筋合いなんかない。
子どもが欲しいのであれば、他のもっと若い女に産ませればいいではないか。あれだけの地位と財力を持ち、魅力的な秀史だ。子どもを産みたがる女は山ほどいる――――そう、例えばエリのように。
「子ども…か…」
できるならば、日名子とてもう一度子どもを産みたいと思う。母子家庭であった日名子は母親という存在を心の底から尊敬していて、いつかあんな母親になりたいと思っていた。ああやって、子どもを全身全霊で守り、愛してあげられる母親こそが、日名子の小さい頃からの夢だった。
だから今でも子どもは産みたい。けれどそれは秀史の子ではないはずだ。
秀史でないのならば、誰の子だろう。魁人だろうか。けれど、魁人はまだ社会人になったばかり。新任の高校教師として頑張っている彼にはまだ結婚の話も子どもの話も早いだろう。
結婚……
そういえば、あの時秀史は『私のもとに戻ってきてもらう』とは言ったが、『結婚』の二文字を使わなかった。
ふと気付いた事実に、日名子は皮肉な笑みを浮かべる。
「ホント、どこまでも卑劣な男ね…」
自分を望んだ秀史の顔が思い出された。暗い――――昏い瞳。共に過ごしていた頃、彼のあんな瞳を見た事はない。
彼もきっとこの7年間で変わったのだろう。より強く、より残虐に。
会社を、自分が心身を尽くして創刊を望んでいた雑誌を人質に捕って、子どもを産めと望んで。
与えるのは愛人の地位というわけか。
「さて…どうしようかな……」
魁人に相談するべきだろうか。けれど、魁人に相談したところで何か事態が変わるとは思えない。玲佳にしても同じだ。

「どうしようかな…」
独り言は虚ろに響く。
知らず、頬を涙がつたった。

重たい心を抱えた翌日、鳴り響く携帯に日名子は叩き起こされた。
「〜〜〜〜〜〜…っ」
久々のまともな休み。魁人も今日は仕事らしく丸一日フリーだ。
そんな貴重な日の朝のまどろみを邪魔されて、日名子は不機嫌なまま携帯を探る。
「はい、本庄です」
『ああ、本庄くん。休みなのにすまない』
「…部長？」
寝ぼけていた頭が急速に冷めていく。
仕事ならば休みを邪魔されても仕方がない。そう思ってしまうほど日名子にとって仕事は大事なものなのだ。
しっかりと身体を起こして部長の話を聞いているうちに、日名子はどんどん面持ちを険しくしていく。
やがて、相槌を加えながらも全ての事情を聞き終えた後、日名子の声は震えていた。

会社が買収される――――？

花木が言うには、大手出版社が日名子の会社を吸収合併するべく動いている事が発覚したらしい。
もともと大手の出版社の中で厳しい状態ながらも頑張ってきた会社だ。けれど、買収されるほど経営状態は悪くないと思っていたのに、考え方が甘かったのだろうか。
『三笠社長がだいぶ株を買ってくれたおかげで少し上調子になってきたんだ。だから内々で進んでいた買収の話も一度は立ち消えた。

けれど、相手方が強硬手段をとってきて――――』
「…え？」
秀史が株を買って…なんだって？
唐突に告げられた事実に、日名子は思わず間抜けた声を出す。
「…経営状態がよくない事を、ひ…三笠社長は知っておられたんですか？」
『どうだろう。でも、なんとなく気が付いているようなところはあったよ』
そんな会社の株を買ってどういうつもりなのか。秀史の考えている事はわからない。
困惑している日名子に、花木はとんでもない事を提案してきた。
『本庄くん、三笠社長と知り合いだったよね。こんな事頼んで本当に申し訳ないんだが、買収をなしにするために彼の力と名前が借りたい。どうか、君からお願いしてくれないか』
「な！？」
出版業界の大手ならまだしも、畑違いの秀史に頼んでどうなるというのか。
そうは思っても、日名子は直ぐに断る事ができなかった。
秀史の人脈は広い。
大学時代の先輩には、今や経済界の帝王と呼ばれる大物もいたはずだ。もしかしたら何とかなるのではないかと思う。
けれど…頼む、その代償は間違いなく――――
携帯をギュッと握りしめる。汗がじんわりと浮き出た。
花木は秀史と日名子が元夫婦で、秀史が彼女を求めてきている事を知らないはずだ。知っていたらこんな無理な頼み事をいう人物ではない。なりふり構っていられない程事態は切迫していて、そして彼は会社を愛しているからこそこんな無茶な行動に出ているのだと想像がついた。
会社が――――無くなる？

会社を愛しているのは日名子も同じだ。この7年間、自分を支えてきてくれた仕事。それを成してくれた場。

ギリギリと携帯を握りしめる手に力がこもる。

奥歯を強く噛みしめる。

『…本庄くん？』

電話の向こうで、日名子の異常に気がついた花木が訝しげな声で名を呼んでくる。

しばらく間が空いて、やがて花木がため息を吐くのが聞こえてきた。

『…すまなかったね』

「……部長？」

『どうやら自分でも予想以上に動揺していたようだ。こんな無茶な願い事を君にさせるわけにはいかない』

先ほど言っていた事とは１８０度違う花木の言葉に、日名子は驚く。

『自分たちの会社だ。上の連中らで話し合って、どうにか自分たちだけで頑張ってみよう。休み中にすまなかったね。心配させてしまったけれど、よく休みなさい』

「部長…」

まるで父親のようにやわらかい声でそう告げて、電話が切られる。

どうやら、日名子が動揺しているがわかったらしい。もしかしたら秀史に対して何か思うところがあるのだと察したのかもしれない。いずれにせよ、彼は部下を使ってどうこうするより自分自身で何とかする道を選んだ――――部下を守ろうとするように。

切られた電話を茫然と見つめる。

日名子はその場から動けなくて、ただ切られた携帯電話を手に考え込む。

やがて、どれだけの時間が経っただろうか。

ゆっくりと日名子は動きだすと、ごみ箱の中に手を入れ…先日捨てた、けしてもう一度手にするつもりのなかった紙切れを手に取った。

危機（後書き）

のろま更新ですみません…

どうもうまくキャラが動いてくれないｏｒｚ

文章力にもいろいろ思うところはありますが、とにかく頑張って更新します。

『…思ったよりも、早かったな』
電話口で聞いた声は、相変わらず低くて威圧感がある。ただ言葉通りの驚きが含まれていた事が珍しくて、日名子は思わずフッと笑った。
そんな彼女の態度に何を察したのか、秀史が問うてきた。
『もしかして、S社が動いたのか？』
流石は株主と言えばいいのか、どこまでも嫌味な男だ。日名子はそれには答えずに簡潔に秀史に尋ねる。
「ねえ、貴方が動けば、買収の件はなくなるのかしら？」
無駄な会話をする気は一切ない。欲しいのは、「Ｙｅｓ」か「Ｎｏ」かただそれだけだ。
日名子の声に、秀史はおおよその事情を察したのだろう。しばらく沈黙した後、ややからかうような声が返ってきた。
『なくなると言えば、君は私のものになると…そういうわけか？“償い”なのに、更に条件を求めるとは厚かましいね』
「会社がなくなれば、貴方が差し出した条件は根本から成り立たなくなるわ」
条件を変更せざる得ない状況だという事を念押しした上で、日名子は今までで一番確固たる口調で問う。
「もう一度聞くわ。貴方に私を差し出せば、買収はなくなるの？」
切実な日名子の口調に、秀史も揶揄するのをやめる。
重たい沈黙が走る。
『…それが、君の望みならば』
静かに、秀史が言葉を発した。
『それで君が手に入るのならば、この魂の全てを売り渡してでも買収を止めてみせると約束しよう』

思いがけない言葉に、日名子は自分で望んだ条件ながらつかの間思考を止めた。
言葉の裏に、隠しきれない熱情に似た想いを感じとって息を飲む。
「……冗談にしては、性質が悪いわ」
『冗談などであるものか』
熱っぽい言葉に喉が渇く。渇いた唇を舌で舐めた。
その場の雰囲気に流されたくなくて、日名子は彼の言葉の衝撃を緩衝できる要素を探す。
「貴方が欲しいのは、私の“償い”と、その証となる子どもなんでしょう？」
そう、彼が欲しいのは“償い”であって自分ではないはずだ。かつてのように―――愛されたいと期待してはならない。
『…そうだな。確かに、私は君の“償い”が欲しい。子どもはもとよりね。ただ、そのためには君が私のものになる事が必須条件だろう？』
「それは…」
秀史は間違った事を言っているわけではない。けれどどうしてか、その言葉が日名子に戸惑いを与える。
『だから、今君のベッドを温めている若造とも別れてもらう。私が欲しいのは唯の子どもではない。確実に“自分の”子どもといえる存在だからね』
唐突に言われた台詞に、日名子はカッとなった。それは、日名子に対する侮辱に他ならない。
「私が貴方の提案を飲んだ後で浮気をするとでも！？私はそんな女じゃなないし、まして貴方に不誠実だと責められる謂れはないわ！馬鹿にしないで！！」
共に過ごした7年前、誰より彼に献身的に愛を捧げていたのだ。
それは彼も感じていたのだろう。怒声を浴びせた日名子の向こう、電話越しで秀史が黙りこむ。

『……そうだな。君は自虐的なほどに献身的な女性だった…今はどうかは知らないが』
「まだ言うつもり！？」
『そうじゃない。そうじゃないが…私は君を他の誰とも共有するつもりはないんだ。早急に今の男とは別れてもらう』
「いい加減にして！それに、私はまだ貴方の提案を飲むと断言したわけではないわ！！」
『じゃあ、他に何かいい案があるとでも？…会社を救いたいんだろう？』
「それは……っ」
絶句した日名子に、秀史はフンっと笑う。それがどうしようもなく悔しくて、日名子は唇を噛みしめた。
やはり、この男に温情を期待するのは間違っているのだろう。
一瞬でも胸をときめかせた自分の愚かさが嘆かわしい。熱情などという、ありもしない想いを感じてしまった自分があまりに惨めだ。

もう一度、そんな男のものになるの……？

「お願い……もう少し、考えさせて…」

掠れた、かろうじて聞き取れるほどの小さな声でそう呟くと、日名子は携帯電話を切った。

嫌味なほど青い、突き抜けるように高い空を仰ぎながら、日名子は手を握りしめる。くしゃりと、手の中にあった硬質の髪が潰れた。
気分転換になるかと思って近所の公園に出てきたけれど、気分転換どころかますます気分は沈むばかりだ。
彼に援助してもらう以外に、何か方法がないのか。考えても日名

子にはいい案は浮かばない。
先ほどの電話での花木の声が思い出される。
共に新しい雑誌を作り上げようと言った玲佳の笑顔が心に浮かぶ。
秀史の提案を飲めば――――あの人たちが救われる。
けれど、その代償に求められるものは他ならぬ日名子自身。それも、あの電話での会話を思う限りでは、秀史は結婚したら日名子を自由にさせる気はないだろう。

何が、彼をあそこまで日名子に執着させるのだろう。

自分はどうすればいいのだろう……

選ぶべき道はどれなのか。まるでこの空のようにどこまでも果てが見えなくて、日名子は途方に暮れる。
玲佳にも、まして魁人にも相談できない。
そして彼らを除けば、別れてから仕事一筋で生きてきた自分には頼れる相手がいなかった。
「お母さん…」
思わず、もう１０年以上前に亡くした母を呼ぶ。
母がいれば、自分に何かアドバイスをしてくれたのかもしれない。いつだって誰より仲が良く信頼できる人だった。けれど、現実問題自分は独りだ。
ほろほろと涙が止まらなくなる。最近の自分は涙腺が壊れたようだ。この7年間を経て、滅多な事では泣かなくなったはずなのに、未だに秀史と彼との過去は日名子をあっという間に涙の海に溺れさせる。
「お母さん……」
もう一度母の名を呼んで俯いた。
孤独だった。

どれだけそうしていただろう。
ふと自分の前に誰かが立っているのを感じて、日名子はふと顔を上げた。
「大丈夫ですか？」
視線の先では、品のよさそうな女性が日名子を気遣わしげに覗きこんでいた。

葛藤（後書き）

秀史が何をしたいのか、彼の言動の不安定さに日名子と作者が悩まされてます（爆）
日名子ちゃんは葛藤中。以外に粘ってくれるので、秀史と読者様はじれじれでイライラしているかもしれません。申し訳ありません（汗）

そして最後に新キャラ登場です。
これで大体全員そろったかな？

不思議な出会い

艶のある髪を片耳の下で一つにまとめ、ふわりと微笑む女性。年の頃は玲佳より少し若いように見えるから、３０代後半くらいだろうか。

「大丈夫ですか？」

女性は、タオル生地のハンカチを日名子に差し出して問う。

やわらかな笑顔はまるで初めて会った人のように思えないほど親しみに溢れ、声音も温かさに包まれている。気遣わしげな薄茶色の瞳は、どこまでも優しく慈しみに満ちていた。

何も言えず女性を見つめている日名子に、彼女は再びにこりと笑って、ハンカチで日名子の頬を押さえる。いつの間にか再び溢れていた涙が、彼女のハンカチにやさしくぬぐいとられた。

その仕種の一つ一つが優しすぎて、日名子はますます涙が止まらなくなる。すると、女性は何も言わず日名子の隣に座って、何も言わずに背中を撫でる。

彼女が何者であるかも知らないのに、その手の温もりが妙に安心できて、日名子はそのまましばらく泣き続けていたのだった。

「…落ち着いた？」

やがて涙も尽きた頃、女性は日名子の顔を見ながらそう微笑む。

子どものように泣いてしまった自分が恥ずかしくて顔を赤くしながら日名子が小さく頷くと、女性はぽんぽんとやさしく背中を叩いて気にする事はないと告げる。それから日名子に荷物を預けると、席を立ちしばらくして缶を二つ持って帰ってきた。

「カフェオレとココア、どっちがいい？」

「え？」

目をキョトンとさせる日名子に、女性はどちらか選ぶよう再度尋

ねる。戸惑いながら日名子がココアを取ると、隣に座りなおして残ったカフェオレの缶を開けて飲み始めた。
「あの…」
「いいからまずは飲みなさいな。糖分と水分補給が最優先よ」
脱水症状を起こさないようにね、と。
泣きすぎて脱水状態になるとも思えないが、にっこりと有無を言わさぬ口調で言い渡され、日名子もわけわからぬままココアの缶を開け、口をつける。ほんのりとした甘さと温かさに、疲れた心がほっこりと温かくなった。
「おいしい…」
自然と漏れた独りごとに、女性が満足したように微笑み返す。
ココアを飲みきった後でも、女性は何も聞かなかった。空の缶を手に、のんびりと空を見上げている。見知らぬ、しかも泣いている人を慰め、ココアを奢って、何も聞かないその行動の不可解さに、日名子は混乱しながらもありがたく思う。
じっと見つめていると、女性が日名子の視線に気がついてこちらを向いた。不安な日名子の心情を慮るかのように微笑むと、そっと肩に手を置く。
先ほどまで母を思い出していたせいだろうか。彼女が亡くなった頃の母と同じ年頃だというせいもあるかもしれない。やさしく微笑む彼女の姿がどうしても母に重なって見えて、日名子はまた目頭が熱くなる。けれど、今度は懸命に泣かないよう我慢した。
「あの…いろいろとありがとうございます」
「お気になさらずに。ごめんなさいね、知らない人に声をかけられるなんてびっくりしたでしょう？でも、なんだか放っておけなかったものだから」
「いえ…助かりました。その、お恥ずかしい話ですが、とても心細かったんです」
羞恥から顔を赤くしながら日名子が正直に告げると、女性は楽しそうに目を細めた。

そのやさしげな目元に何故か既視感を覚える。母に似ているせいかと思ったが、どこか違う。もう少し最近、身近な誰かによく似ている。
「もう落ち着いたかしら？」
「あ、はい。ホント、ありがとうございます」
思考にふけっていたところに声をかけられ、日名子は慌てて頷く。
「さて、じゃあそろそろお暇するわね」
「え？」
何も聞かずに立ち去ろうとしている女性を見て、日名子は思わず呆けた声を上げた。
「お話を聞いてあげたいのだけれど、この後予定があってね。でも、たくさん泣いたから少しはすっきりしたかしら？」
何の解決にならなくても、泣いて自分の中にある負の感情を吐き出す事はため込んでいるよりよほどいいのだ、と言って彼女は笑う。恥ずかしげに顔を俯かせる日名子にふわりと笑った。
「それに、なんとなくだけれど、私より貴女に話をしてもらいたがっている人がいるような気がするの」
その言葉に、瞬間的に魁人や玲佳の顔が浮かぶ。
日名子の表情から、思い当たる人物がいるのだろうと察したのか、女性は目を細める。そして懐から何かを取り出して日名子にみせた。
雫を逆型にしたような形の水晶に、金のチェーンが付いている。
「これは…？」
「ペンデュラムというの。まあ一種のお守りね」
怪しいものじゃないから安心しなさい、と告げると、彼女は日名子の髪を軽く撫でる。
「何の解決にならない事でも、時に人は心の中にあるものを解き放ってほしいと思うものよ。でも、自分の心をさらけ出すのはとても怖い事で、わかっていてもそれができない人もいる」
言いながら、日名子の手をとり、ペンデュラムを彼女の手に落として両手全体でギュッと握らせる。

「あげるわ。貴女が、その心の内を大切な人に明かせるように」
「……なんで、こんなによくしてくれるんですか？」
「言ったでしょう？放っておけなかったの」
そういう性質なのよ、と彼女は笑う。どうにも解せなかったが、その表情を見る限り嘘を言っている様子はない。
「それに、貴女の事を気に入ったの。今は道に迷っているかもしれないけれど、貴女ならきっと正しい道を選べると思うわ」
何も言っていないのに、何もかもわかったような口ぶりで告げる。他の誰かに言われたらその思わせぶりな口調に腹が立つだろうに、不思議と日名子は安心してしまった。
女性は神秘的な薄茶色の瞳で日名子を覗きこむと、まるで占い師のように言葉を紡ぐ。
「貴女は人を守り、愛する事を本分とする人。自分にとって何が一番大切で、何を守りたいのかを明確にすれば自ずと答えは出るはずよ。たとえそれで傷ついても、乗り越えた先に新たな道が開けるはず」
「え……」
「またお会いしましょう、日名子さん」
ふわりと微笑んで去る背中を茫然と見つめる。自分が一度も名乗っていない事に日名子が気づいたのは、女性の姿が消えた後だった。
手の中に残るペンデュラムだけが、まるで幻のようだった今の出会いが確かである事を語っていた。

一方。

日名子と別れたその女性は、自分の待ち合わせの相手を見つけると、向かい合わせにカフェのテーブルについた。
「日名子さんに会いました」
単刀直入な言葉に相手はピクリと身体を震わせて彼女を見る。その先を聞こうとするように軽く身を乗り出したのを見て、女性はふっと微笑んだ。
「だいぶ追い詰められているようですよ」
頼りなさげに座り込んでいた日名子の姿を思い出し、女性はふっと視線を落とす。けれど、去り際の彼女の瞳は戸惑いながらも生来の芯の強さを窺わせるものだった。
だから、きっと……
目の前の相手に苦笑しつつ、遠くの日名子の未来を想って、彼女は静かに瞳を閉じた。

不思議な出会い（後書き）

更新が遅くなりまして申し訳ありません。
そして何やら自分でもよくわからない事に…（汗）新キャラ名前すら出なかった…
いえ、名前も正体もそのうちハッキリ出ます。出る…までは長いかもしれませんが。

次回、ようやく日名子ちゃん本領発揮？秀史も頑張る…はず！（あくまで予想）
魁人のターンはその次くらいでしょうか。
彼も出番はあるのでお待ちください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0831m/

愛の氷獄

2010年10月8日20時10分発行